生物多様性インタビュー

中瀬　勲　さん

兵庫県立大学大学院教授　緑環境景観マネジメント研究科長
兵庫県立淡路景観園芸学校長　　兵庫県立人と自然の博物館副館長

兵庫県に移られてから 20 年。兵庫県立人と自然の博物館の設立や兵庫県の地域づくりに深く関わり成果を上げられました。中瀬先生は、「地域の人々と自然環境・文化をどうしていくのかということを一生懸命やらせてもらったことが、今の糧になっています。」とおっしゃいます。

◆造園学、景観計画の研究者になられたきっかけは何ですか？

一番最初の記憶として、曾祖父と家のすぐ近くの田んぼの土手で、ツクシとヨモギを見たのを覚えています。曾祖父は、川漁が大好きでした。梅雨の頃には、フナ、コイ、ナマズなどが細い水路を通って田んぼに遡上してきます。小学校から中学校の頃は、曽祖父の影響もあり、網を仕掛けて川魚を捕る遊びに夢中になっていました。

住んでいた集落には、30 軒ぐらいの民家があり、その中に豆腐屋さんもありました。豆腐屋のおじさんは、早朝から仕事をして昼になると豆腐が売り切れるため、午後は子供たちの今風に言うとプレイリーダーを買って出ました。小中学生から高校生まで一緒になって遊んだ経験が、仕事上でのマネジメントにもかなり繋がっています。

大阪府立大学に入学し、当時農業工学科に緑地計画工学研究室を立ち上げられた久保教授に魅力を感じ指導を受けました。私は農業工学科の 3 期生ですが、当時新たらしい学科が、そして新しい建物ができて、教員も学生も何かやろうと、燃えていました。カリフォルニア大学バークレイ校に客員研究員として渡米させても貰いました。

◆生物多様性の重要性について、一般の方に理解しやすくするためにどのような説明をされていますか。

生物多様性の重要性について、生き物の歴史的な時間軸上での繋がりと、現在の世の中での生き物の繋がり（同一次元上での生き物の繋がり）と、両面があることを説明しています。

兵庫県立大学で動物生態の専門家が、外来生物問題を分かりやすく説明する例えとして、ジグソーパズルを用いています。すなわち、ジグソーパズルの中に新たなコマを入れるとパズルが完成せず駄目だと説明されています。一方、コマがなくなってパズルができなくなるということを絶滅の問題だと説明されています。

◆中瀬先生の日頃の取組の中で、生物多様性保全と持続可能な利用と関連の深いものをいくつか教えていただけますか。

兵庫県の丹波地方において、平成元年(1989) に「丹波の森構想」が策定され、具体的な取り組みが始められて 20 余年になります。「丹波の森構想」とは、森・畑・田・集落・河川などを含む地域全体を丹波の森と称し、みんなが協力して良い環境を作ろうとするもので、私は最初からその取り組みに関与させてもらっています。

丹波の森構想が策定される頃、貝原元兵庫県知事は、丹波の森がウィーンの森とよく似ていると思っていられたのでしょう、週末に都市住民が森で休養し、ウィークデーは都会に戻って生活するという、いわゆる「交流」する生活圏形成を提案され、ウィーンの森に丹波の人と一緒に行かれたりされました。その頃、生物多様性という議論はありませんでしたが、丹波の森構想は「人と自然と文化の調和」をテーマに各種事業が継続されてきました。

構想策定 20 周年の平成 20 年度に、1 年間かけて各種ステークホルダーが参加して構想の評価・検証を行いました。丹波で何ができて、何ができなかったかを議論する中で、人工林・広葉樹林の維持管理なども話題となり、生物多様性の観点もみなさんの意識の中にあったと感じます。

【トピック】
里山保全へ
都市パワーを
活用

（実績）
篠山市：2件
（三菱電機・NPOエコラ倶楽部）

丹波市：1件
（アサヒビール）

調整中：1件
・
・

兵庫県
丹波県民局HPから

企業と住民が協働

企業の森づくり事業

社会貢献活動に取り組む企業と地域集落が「参画と協働」「長期継続」をキーワードに里山保全活動を中心とした地域づくりに取り組み、文化交流などを通じて丹波地域の活性化を図る事業が進んでいます。

このほど、三菱電機(株)が篠山市油井地区内で活動する協定が締結され、モデル第1号事業として「子どもたちが楽しめる森づくり」を目標に歩道整備や森林保全などの活動を開始しました。モデル事業の成果は、本格実施に向け活用します。

里山を舞台に行われたオープニングセレモニー

問丹波県民局柏原農林振興事務所☎0795(72)0500(内306)
☎0795(73)3795(直通)

図１　企業の森づくり事業

丹波地方で最近面白い活動の一つに、企業と地域住民が協働して実施している『企業の森づくり事業』(図１)があります。兵庫県の丹波県民局が丹波の集落・森と企業の方とのマッチングを行っています。この取り組みでは、三菱電機㈱やアサヒビールなどの社員の方が丹波に来られて、集落のコミュニティーづくりから山の作業まで、地域全体と関わる森づくりを行っています。山で木を伐ったり、畑の手入れをしたり、地元のおじさんと地域の活性化について喋ったり、企業側は福利厚生的な活動ができ、地域側はコミュニティーの活性化や森の保全などに応援してもらえる。丹波は大阪から 1 時間圏なので、日帰りでも十分活動できるため、最近活動が活発になって来ています。

生物多様性とは直接関係しませんが、『シューベルティアーデ丹波』(図２)という活動も忘れてはいけません。シューベルティアーデ丹波とは、シューベルトを聞くのが好きな人という意味で、この活動は今年で 15 年目になります。毎年夏から秋にかけて、丹波の各集落を巡りながら、世界各国からのゲスト奏者を交えた本物のクラッシックを演奏する文化芸術活動が行われています。ここ数年はキン・コン・カン・コンサートといって、小学校とか中学校に訪問し、子供達に本物の演奏を聞かせる活動も併せて行われています。

図２　シューベルティアーゼ丹波のポスター

http://www.schubertiadetamba.gr.jp/ より

また、市民オペラ『おさん茂兵衛 丹波歌暦』も興味深いものです。近松門左衛門や井原西鶴の作品に登場する「おさん茂兵衛」(図 3)を題材に、物語のゆかりの地である丹波での逸話をモチーフにした市民オペラが、平成 14 年から創作・上演されています。丹波ファンを増やすために、他の色々な分野にも取り組み「おさん茂兵衛」を発信し続けていられます。

図 3　おさん茂兵衛の取組

市民オペラのポスター(左)とお酒(右)

このように、丹波では、森とか生物多様性を大切にしながら、文化芸術活動を積極的に展開され、活動の幅が広がっています。

この他、間伐材を生産現場からしっかりとショートカットして、供給者にまわして山を良くしようというＮＰＯが活動していたり、「たんばぐみ」というＮＰＯは地域内循環に積極的に取り組んでいます。特に「丹波の森研究所」は、私が所長をつとめていて、(財)兵庫丹波の森協会が、丹波地域のシンクタンクと中間支援組織と両方になることを目標として設けた調査研究機関です。地域づくりに関する諸分野の非常勤の研究員９名が所属し、地域づくりにおけるアドバイス、情報提供、学習会の相談など住民活動の支援のほか、丹波の森づくりの基礎資料となる調査研究、講演や報告などを通しての丹波の森構想の啓発・普及・行政諸事業における委員会への出席をはじめとするアドバイザー協力などを行っています。

丹波地方では、平成 7 年から「緑条例（緑豊かな地域環境の形成に関する条例)」が施行されています。緑条例は、都市計画の白地区域がかつてかなり乱開発されたことから、白地区域を「森を守る区域」、「森を生かす区域」、「さとの区域」、「まちの区域」、「歴史的な町の区域」というゾーンに分け、開発行為等を誘導しています。本条例は平成 15 年から全県で施行されています。

この条例には住民が主体となって、自分たちで自分たちの地区のルールづくりを行う制度（計画整備地区制度）もあります。集落などの一定のまとまりのある地区において、住民の方々が話し合い、自分たちのまちのルール（地区整備計画）を決めることができます。地区整備計画の内容は、住民の方々が話し合い、地区の将来像を描き、将来に望ましい土地利用計画、緑化計画、景観計画、建築計画などを策定します。地区整備計画が認定されると、区域内においては、すべての開発行為、建築行為について市町への届出が必要になるとともに、緑条例が適用される一般の地域における基準より地区整備計画による基準が優先される仕組みになっています。

地区整備計画を策定するプロセスにおいて、丹波の森研究所の登録研究員が、－大阪・神戸・丹波に住んでいる人などがいますが―アドバイザーとして活躍しますが、常に入り浸りなので、改めて現地調査をする必要はないのです。ある集落から呼ばれると、夜な夜な行って議論する。

図 4　「丹波の森大学」の様子

http://www.tanba-mori.or.jp/jigyou_moricollege.html より

でも、どうしてそんなに集落の人が乗ってくるかというと、「丹波の森大学」(図 4)という活動を行っていることと関係があります。毎年 100 人程度の方を対象に、年間 10

回の講座を開催します。今年は、涌井史郎さんも講師の一人になってもらいますが、丹波の森大学の活動で、丹波の森の良さとか生物多様性の話とかをしてもらっています。もう 20 年になり、2000 人近い卒業生がいます。先ほどお話したウィーンの森への親善訪問団も毎年約 40 名程度の方がいらっしゃり、震災の年は中止でしたがこちらも 20 年近く続いています。その人達も 1000 人近くいます。ということは 14、15 万の人口のところで、数千人の方がウィーンに行ったり、森大学を卒業していますから、生物多様性のことを議論するといったら、パーッと乗ってこられます。市民の方の積極的な活動を見ることが、とても楽しいです。

20 年前に兵庫県に来てから、ずっと丹波に関わってきましたが、丹波は私にいろんなことを教えてくれたところです。現在、県立の淡路景観園芸学校(図 5)で校長を務めていますが、第 2 のフィールドとして淡路でも同様の取り組みを行っています。但馬、西播磨もまた同じです。兵庫県というのは、日本海側では冬期降雪が多かったり、瀬戸内側は乾燥していてため池がたくさんあったり、いろんな気候風土をあわせ持っています。形質の違うところで、地域づくりの応援をさせて貰って、楽しみながら仕事をさせてもらっています。これらの活動は、生物多様性に直接関係があるか分かりませんが、結果的に繋がっています。コウノトリのプロジェクトも最初の立ち上げの頃からずっと関わらせてもらいました。現在、北はりま田園空間博物館という取組を今おこなっていますが、それも最初の時のワークショップからはじめさせてもらいました。

図 5

里山にある全寮制の兵庫県立淡路園芸学校

今までお話したように、丹波の森、淡路をはじめ兵庫県のいろいろな個性ある地域で、地域の人々と自然環境・文化をどうしていくのかということを一生懸命やらせてもらったことが、今の糧になっています。

◆日本を代表する里山（個人的に気に入っているということでも結構です）を挙げていただけますか。

丹波全域に広がる里山と北淡路の里山です。

図 6　丹波の里山

図 7　丹波の豊かな食材

生物多様性インタビュー②

2010.6.11　インタビュー

聞き手　田村省二（COP10 推進チームリーダー）

中瀬　勲（なかせ　いさお）

1948 年大阪府生まれ。兵庫県立大学大学院教授、緑環境景観マネジメント研究科長、兵庫県立淡路景観園芸学校長、兵庫県立人と自然の博物館副館長などを兼任。農学博士。大阪府立大学大学院終了後、カリフォルニア大学客員研究員等を経て現職。その間、日本造園学会長、人間･植物関係学会副会長等を歴任。財務省独立行政法人評価委員会臨時委員、兵庫県環境審議会、同都市計画地方審議会委員等とともに、阪神グリーンネット事務局長等の震災復興のまちづくりやＮＰＯ活動等に関わる。日本造園学会賞、兵庫県科学賞等を受賞。